



岡本 和子

Kazuko Okamoto

文学部

文学科ドイツ文学専攻准教授
ドイツ近代文学・批評

Profile

1974年 東京都生まれ
1996年 明治大学文学部文学科卒業
2003年 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士(文学)
 大東文化大学専任講師・准教授を経て2013年より現職

主な所属学会

日本独文学会、日本アイヘンドルフ協会

人はなぜ 幼年時代を書くのか

大人になった私たちは誰もが、かつては子どもでした。みずからの幼年時代とは、大切な思い出であれ、消してしまいたい過去であれ、「私」の歴史の一部を成すものです。私は現在、ドイツ近代文学における「子ども」の意味を問い直し、近代以降、「幼年時代」が文学のテーマとして繰り返し取り上げられている理由を明らかにしようと試みています。

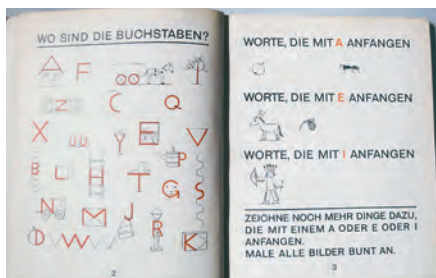
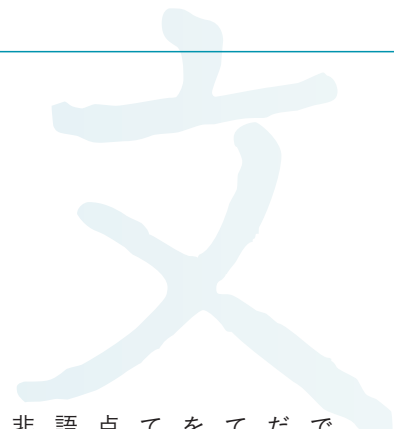
ヨーロッパで「子ども」が「子ども」として認識されたのは、18世紀後半以降、とりわけ19世紀に入ってからであるとされています。それまで、子どもは「小さな大人」、あるいは「不完全な人間」でしかなく、子ども服や

子ども部屋といったものは発達していませんでした。しかし、産業革命に伴う労働形態の変化や都市文化の発達によって、居住形態や教育方法などの、子どもや家庭を取り巻く環境が変化するにつれ、子ども独自の世界に光が当てられるようになったのです。

ドイツも19世紀初頭は激動の時代を迎えていました。フランス革命とそれに続くナポレオン戦争は、国民と国家の関係に対する人びとの意識を大きく変え、自然科学の発展は、人間をどのように捉えるべきかについて、人文科学の分野においても再考を促しました。ドイツ文学ではまさにこの時期に、子どもが大きく

テーマ化されるようになります。グリム兄弟による『子どもと家庭のための童話集』(初版1812年)——いわゆる『グリム童話』——や童話集の出版が相次ぎ、小説や詩においても、子どもが「無垢で神聖な存在」、あるいは「新しい時代の担い手」として前面に登場してきます。

しかし、子どもという形象は、言語との関連で捉えた場合、そうしたユートピア的なイメージとは異なる像を浮かび上がらせます。すなわち、「言語をもたない存在」という像です。幼年時代という、いわば「言語をもたない生の歴史」は、非言語的なものを含むという点で、言語表現



トム・ザイトマン・フロイト著
『万歳、僕たち読んでいるんだよ! 万歳、
僕たち書いているんだよ! 遊びで覚える
初等学習本』(1930年)



字習い積み木箱 (Photo:Andreas Praefcke)

である文学においては特異なテーマ
だと言えるでしょう。直接言語とし
て叙述することのできない幼年時代
を、文学はどのようにして言語化し
ているのでしょうか。言語という観
点から子どもを捉えた文学は、非言
語的な側面を持つ幼年時代の記述を、
非言語的な領域と言語世界との「境
界」の記述として行っているように
思われます。つまり、子どもを「言
語を学びつつある存在」として描い
ているのです。

子どもの言語獲得というテーマは、
小説や詩のなかにもみ見て取れるわ
けではありません。ABCを学ばた
めの学習本も、子どもの言語獲得を
テーマとする叙述の一例と見なせま
す。19世紀以降、実践的な言語習得
を目的とする文字学習本や歌の本も
さかんに出版されました。文学の周
縁部分であるこうしたジャンルも、
それぞれの時代の刻印を受けた幼年
時代の記述として、私の研究の貴重
な対象になっています。

最後に、私が集中的に取り組んで
いる作家のひとり、ヴァルター・ベ
ンヤミン(1892—1940年)
の言葉を紹介したいと思います。彼
は、文学・芸術批評、歴史哲学、
散文、ラジオ番組原稿など、多
方面にわたって執筆活動を行っ
た、ベルリン生まれの批評家だ
す。子どもに対して並々ならぬ
関心を抱き、絵本やおもちゃの
蒐集までしていた彼は、
『1900年頃のベルリンの幼年
時代』(1932—38年)と題す
る散文集のなかで、「字習い積み
木箱」に対して感じる憧憬につ
いて、次のように書いています。

この字習い積み木箱のなかに私が
本当に探し求めているのは、幼年
時代そのもの、すなわち、手が粹
のなかに文字を押し入れて言葉に
なるように並べた、その手の動き
のうちに横たわっていたような、
幼年時代全体なのだ。手はその動
きをまだ夢想できるが、目覚めて
それを実際にやることは、もはや
決してできない。

みずからの内にありながら二度と
手にすることの叶わない幼年時代と
は、言語化し、意味づけることに
よって片付けてしまうことのできな
い、自分の内なる謎なのかもしれま
せん。この謎を夢想しつつ言葉とし
て表現しようという試みが、幼年時
代を書くということなのでしょう。
だとすれば、その根柢にあるのは、
「私」を形成しているのは「言葉」
である、という認識にほかなりませ
ん。言葉を学ぶ子どもという形象
は、実は、言葉を求めて模索する
「文学」の営みそのものの象徴なの
です。